

島本町文化財調査報告書

第 35 集

広瀬遺跡発掘調査概要報告

平成 31 年 3 月

島本町教育委員会

序 文

本報告書は、原因者による宅地造成工事に伴って、平成26年度に実施した広瀬遺跡の発掘調査成果を報告するものです。

広瀬遺跡は、本町の平野部に最も広く存在する遺跡であり、この広瀬遺跡から多種多様な遺構・遺物が見つかっています。

近年では、水無瀬離宮に関連する施設や西国街道（旧山陽道）、平安時代の貴族の邸宅、縄文時代の石器の工房跡といった本町では例のない遺構の発見が続いており、今回の発掘調査においても、本町では発見例の少ない古墳時代や弥生時代の遺構が見つかりました。これらの資料を蓄積していくことが、本町の歴史を解明するにあたっての大きな手掛かりとなると思われます。

また、未発見の文化財も含め、本町には数多くの文化財が存在し、これらの文化財を保護・保全し、守り伝えていくことが私達の大切な役目と考えます。

最後になりましたが、調査にあたりまして、多大なご指導、ご協力を賜りました関係諸機関の皆様、また発掘調査にご理解、ご協力いただきました土地所有者の方や近隣の皆様方には、紙面をおかりして深く感謝しお礼を申し上げますとともに、本町の文化財保護行政に対し、今後とも、変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成31年3月

島本町教育委員会
教育長 持田 学

例　　言

1. 本書は、平成26年度の原因者負担金事業として、大阪府教育庁文化財保護課の指導のもと、島本町教育委員会が実施した、広瀬遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、島本町教育委員会事務局教育こども部生涯学習課職員木村友紀を担当者とし、発掘調査は平成26年9月1日に着手し、平成26年10月6日に終了し、島本町立歴史文化資料館整理室で引き続き整理調査及び報告書作成業務を実施し、平成31年3月31日に本書の刊行を以って完了した。
3. 調査及び整理作業にあたっては、下記の調査員及び調査補助員の参加を得た。(順不同)
【調査員】 坂根 瞳　原 由美子
【調査補助員】 布施 英子　川端 玲子　竹村 洋香　萱原 朋奈
4. 本書の執筆は木村（第1章、第2章第1～3節、第5節）・久保（第2章第4節）が行い、作成・編集は木村・久保・坂根が行った。
5. 本調査に関わる資料の保管と活用及び本調査によって作成された資料などの管理は、島本町教育委員会がこれにあたる。

凡　　例

1. 本書に用いた標高は、東京湾平均海面（T.P. [Tokyo Peil]）を基準とした数値である。方位は、国土座標第IV系における座標北である。
2. 土層断面図の土色は、小山正忠・竹原秀夫編『新版標準土色帖』第12版を使用した。
3. 遺構記号については、以下の通りである。
P : ピット　SK : 土坑　SD : 溝
4. 本書で使用している北は、特に断りのない限りは「真北」を示す。

目 次

序文

例言・凡例・目次

挿図目次・付表・図版目次

第1章 はじめに

 第1節 島本町の地理的概要 1

 第2節 島本町の歴史的環境 1

第2章 調査の概要

 第1節 調査経過 3

 第2節 層位 4

 第3節 検出遺構 9

 (1) 第一遺構面

 (2) 第二遺構面

 第4節 出土遺物 13

 第5節まとめ 14

挿図目次

第1図 島本町内遺跡分布図 (1/20,000)

第2図 調査位置図 (1/5,000) 4

第3図 調査区断面図 (1/100) 5

第4図 第一遺構面平面図 (1/400) 7

第5図 第一遺構面検出遺構断面図 (1) (1/40) 8

第6図 第一遺構面検出遺構断面図 (2) (1/40) 9

第7図 第二遺構面平面図 (1/400) 11

第8図 第二遺構面検出遺構断面図 (1/40) 12

第9図 出土遺物 (1/2・1/4) 13

図版目次

図版一 第一遺構面全景

- 第一遺構面全景（東から）
- 第一遺構面全景（西から）
- 第一遺構面南東張出部全景（北から）
- 第一遺構面南西張出部全景（南から）

図版二 第二遺構面全景

- 第二遺構面全景（東から）
- 第二遺構面全景（西から）
- 第二遺構面南東張出部全景（北から）
- 第二遺構面南西張出部全景（南から）

図版三 SK01、SK29

- SK01遺物出土状況（北東から）
- SK29完掘状況（南東から）
- SK29畔断面（北西から）

図版四 SD30

- SD30完掘状況（南東から）
- SK30北側畔断面（南西から）
- SK30南側畔断面（南東から）

図版五 調査区北壁

- 調査区北壁（東端）
- 調査区北壁（中央付近東）
- 調査区北壁（流路5）

図版六 調査区北壁、南西張出部東壁

- 調査区北壁（中央付近西）
- 調査区北壁（西端）
- 南西張出部東壁（北端）
- 南西張出部東壁（南端）

図版七 出土遺物（一）

図版八 出土遺物（二）



1. 山崎古墳 3. 鈴谷瓦窯跡 5. 水地軒櫻宮跡 6. 松井聖跡 (6) [史] 松井聖跡 (桃正成松聖地) 7. 伝持宵小野從地 8. 鮎谷遺跡 9. 源吾山遺跡
10. 水無瀬往跡 11. 銅所池江塙跡 12. 松井道跡 13. 松井廻所跡 14. 広瀬道跡 15. 広瀬南道跡 16. 山崎西道跡 17. 神内古墳群 20. 山崎東道跡
22. 銅所ノ平道跡 23. 青葉道跡A地点 24. 広瀬溝田道跡 25. 鈴谷道跡 26. 西浦門向道跡 27. 青葉道跡B地点 28. 尾山道跡 1001. 西国街道

第1図 島本町内遺跡分布図 (1/20,000)

第1章 はじめに

第1節 島本町の地理的概要

島本町は、大阪府の北東端、京都府との境に位置する。北は京都府京都市西京区と京都府長岡京市、北東は京都府乙訓郡大山崎町、東南は京都府八幡市、南は大阪府枚方市、西は大阪府高槻市に隣接する。

本町の面積は、約16.81km²で、その約7割が北西部に広がる西山山塊の山岳・丘陵地である。そこには、大阪府の天然記念物に指定されている「大沢のすぎ」、「尺代のやまもも」、「若山神社のツブライジ林」が所在し、豊かな自然が保たれている。

本町の南東は、京都盆地から流れ込む主要三大河川の桂川、宇治川、木津川が合流し、淀川となって大阪平野に注いでいる。淀川は、古代から重要な交通路として活用され、各所に津が置かれた⁽¹⁾。

平野部は、山岳・丘陵地と淀川に挟まれた狭い範囲である。この狭小な平野部には、山陽道（西国街道）が通過し、大阪と京都を結ぶ交通の要衝として栄えた⁽²⁾。

この平野部の北半部には、山地から流れ出る水無瀬川が所在し、平野部をうるおして桂川に流れ込んでいる。また、平野部の伏流水は、今も良水を保ち、後鳥羽上皇の水無瀬離宮にちなんで名づけられた水無瀬神宮の「離宮の水」は、昭和60年7月に大阪府で唯一、環境庁認定の「名水百選」に選ばれている。

人口の推移をみると、昭和30年以前には人口一万人足らずで、平野部にはのどかな農村が広がっていたが⁽³⁾、平成2年までの間に急増し、近年では人口三万人を超えている。

本町の東辺部には国道171号線が通過して主要交通幹線となっており、平成20年には東海道本線JR京都線に島本駅が開設され、商工業を支えるとともに、衛星都市のベッドタウンとして発展している。

第2節 島本町の歴史的環境（第1図）

島本町には、国史跡桜井駅跡（楠正成伝説地）や重要文化財水無瀬神宮茶室・客殿をはじめとして、多くの遺跡などの文化財が存在している。

島本町における人々の生活の始まりは、旧石器時代にさかのほる。段丘の立地に位置する山崎西遺跡では、国府型ナイフ形石器や剥片数点が採集されており、後期旧石器時代に、狩猟採集生活の移動拠点がここにあったことを物語っている⁽⁴⁾。

その後、人々の生活痕跡が長期にわたって途絶えているが、段丘の立地にある越谷遺跡では、縄文時代後期の土器が多数出土しており、ここに集落が営まれたものと考えられている⁽⁵⁾。広瀬遺跡では、縄文時代晩期の堅穴住居が検出され、生活拠点の沖積低地への進出が確認され

た⁽⁶⁾。沖積低地への移行は、水稻農耕文化受容に大きくかかわっているものと思われる。

その後、少し時期を経た弥生時代では、明確な集落遺構の検出はないが、遺物散布状況から、前期に桜井駅跡付近に集落が構えられ⁽⁷⁾、引き続き青葉遺跡⁽⁸⁾や広瀬溝田遺跡⁽⁹⁾に広がりを見せる様子が明らかになってきた。弥生時代後期についても、遺物の散布状況から、越谷遺跡⁽¹⁰⁾や桜井駅跡付近⁽¹¹⁾に集落が想定されている。

古墳時代の集落も、明確な遺構は検出されていないが、広瀬遺跡北西部⁽¹²⁾や越谷遺跡⁽¹³⁾などで、後期の土器散布が確認されている。源吾山古墳群は、この時期の首長墓群と考えられる。

飛鳥～奈良時代には、鈴谷瓦窯が造営され、この瓦窯に程近い御所ノ平遺跡では、瓦窯とほぼ同時期と考えられる竪穴住居が検出されており、瓦工人の住居との見方がある⁽¹⁴⁾。水無瀬川の中流右岸には、奈良・正倉院に伝わる「摂津職嶋上郡水無瀬荘図」から、東大寺領荘園「水無瀬荘」があったことが分かる。

平安時代になると、桓武天皇や嵯峨天皇といった天皇や皇族が頻繁に水無瀬野を訪れ、遊獵を行っている⁽¹⁵⁾。9世紀後半には、惟喬親王の御殿が、水無瀬にあったと言い（伊勢物語）⁽¹⁶⁾、広瀬遺跡で検出された平安時代前期の建物群を、惟喬親王の水無瀬離宮関連施設と考えられている⁽¹⁷⁾。

鎌倉時代には、後鳥羽上皇が正治元（1199）年に水無瀬離宮を造営し、頻繁に訪れている⁽¹⁸⁾。この水無瀬離宮は健保4（1216）年に洪水倒壊し⁽¹⁹⁾、翌年、山上に再建されている⁽²⁰⁾。広瀬遺跡からは、水無瀬離宮に関わる建物跡や所用瓦⁽²¹⁾、西浦門前遺跡からは、庭園施設などが検出されている⁽²²⁾。

室町時代への過渡期、太平記で有名な楠公父子の別れの名場面となった史跡桜井駅跡がある。この史跡は、延元元（1336）年足利尊氏の大軍を迎え撃つため京都を発った楠木正成が、ここで長子の正行に遺訓を残して河内へと引き返らせた「楠公父子別れの地」として広く世に知られ、現在もこの地を訪れる観光客は後を絶たない。

【註】

（1）長山 泰孝 「第三章 古代の島本」「島本町史」本文篇 島本町役場 昭和50年

（2）（1）同。

脇田 修 「第五章 戦国から近世へ」「島本町史」本文篇 島本町役場 昭和50年

（3）上野 雄将 「第十章 現代の島本町」「島本町史」本文篇 島本町役場 昭和50年

（4）都出 比呂志「第二章 島本のあけぼの」「島本町史」本文篇 島本町役場 昭和50年

（5）川端 博明 「縄文土器」「越谷遺跡 他 発掘調査報告書」名神高速道路内遺跡調査会 平成9年

（6）木村 友紀 「島本町文化財調査報告書」第28集 島本町教育委員会 平成27年

（7）中津 梢 「島本町文化財調査報告書」第8集 島本町教育委員会 平成18年

小川 裕見子「第5章 出土遺物」「桜井駅跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 平成19年

（8）中津 梢 「- 2 平成18年度青葉地区遺跡範囲確認調査」「島本町文化財調査報告書」第10集 島本町

- 教育委員会 平成19年
木村 友紀 「2. 青葉地区（A B T15- 2）」「島本町文化財調査報告書」第31集 島本町教育委員会 平成29年
- (9) 久保 直子 「第1節 水無瀬地区遺跡範囲確認調査」「島本町文化財調査報告書」第14集 島本町教育委員会 平成22年度
- (10) 大塚 隆 「第3節 越谷遺跡の調査」「越谷遺跡 他 発掘調査報告書」名神高速道路内遺跡調査会 平成9年
- (11) 中津 桂 「島本町文化財調査報告書」第9集 平成18年
小川 裕見子「第5章 出土遺物」「桜井駅跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 平成19年
- (12) 久保 直子 「島本町文化財調査報告書」第13集 平成21年
- (13) (10) 同。
- (14) 野口 尚志 「島本町文化財調査報告書」第4集 島本町教育委員会 平成15年
- (15) (1) 同
- (16)『伊勢物語』第82段「渚の院」、第83段「小野」
- (17) 木村 友紀 「島本町文化財調査報告書」第26集 平成26年
- (18)「明月記」正治二年正月十二日条 他
- (19)「百鍊抄」建保五年正月一〇日条
- (20)「明月記」建保五年二月八日条
- (21) 久保 直子・木村 友紀 「島本町文化財調査報告書」第19集 島本町教育委員会 平成24年
- (22) 木村 友紀 「第4節 桜井地区（S I 14- 1）遺跡範囲確認調査」「島本町文化財調査報告書」第27集 島本町教育委員会

第2章 調査の概要

第1節 調査経過

調査期間：平成26年9月1日（月）から平成26年10月6日（月）

調査地：大阪府三島郡島本町広瀬四丁目555- 1、555- 3

調査面積：約549m²

当調査は宅地造成工事に伴うものであり、道路が新設される場所を対象として調査を行った。

当調査地は、埋蔵文化財包蔵地である広瀬遺跡の範囲内であり、調査地の周辺では、平成24年度に実施した約100m北西に位置する調査地から平安時代の貴族の邸宅と考えられる建物群が検出されており、同年度に実施した約250m北東に位置する調査地から縄文時代の竪穴式住居と石器工房跡を検出している（第2図）。

当調査地においても、これらに関連する遺構・遺物が検出される可能性があったため、試掘坑を道路部分敷設予定地の東端・中央・西端付近の3か所設定し（試掘坑1・2・4）、平成26年8月9日に試掘調査を実施したところ、試掘坑1・2において2層の遺物包含層を確認した。試掘坑1・2と比較して、試掘坑4は遺物が希薄であったため、試掘坑2から試掘坑4にかけて筋堀りを行い、遺物包含層の存在を確認した。その結果、一部流路状堆積により削平されているところもあるものの、遺物包含層は試掘坑4まで続いていることが確認できたため、道路敷設予定地全面を発掘調査対象とすることとした。また、流路状堆積を確認した場所につ

いては、その堆積している深さを確認するため、北端を断割って層位の確認を行った（試掘坑3）。

上層を第一遺構面とし、平面的に掘り下げたところ、建物跡等は確認できなかつたが、ピット・溝跡・土坑等を検出し、その埋土に含まれている土器の年代から、それらは古墳時代に属するものであることがわかつた。

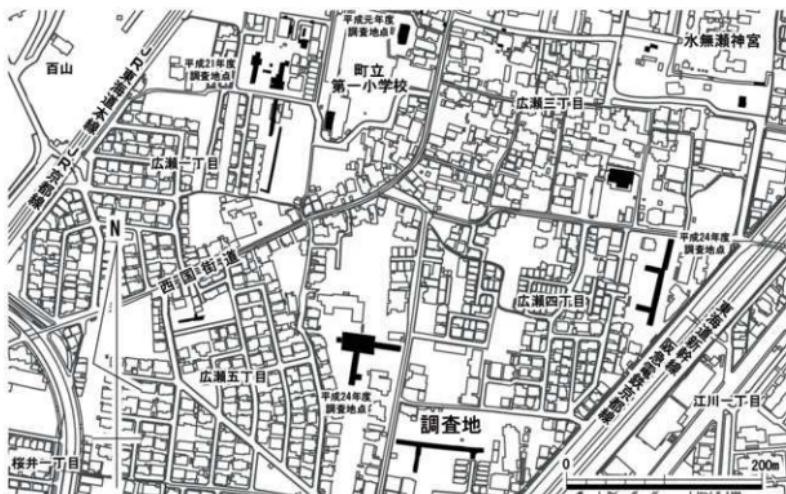
第一遺構面の記録保存終了後、地表面から約1.6mの深さに位置する下層の遺物包含層まで機械掘削を行い、平面的に遺構の有無を確認したところ、少数ながらピット・溝跡・土坑を検出し、その埋土に含まれている土器の年代から、それらは弥生時代に属するものであることがわかつた。

第二遺構面の記録保存終了後、順次、埋戻しを行い、平成26年10月6日に調査を終了した。

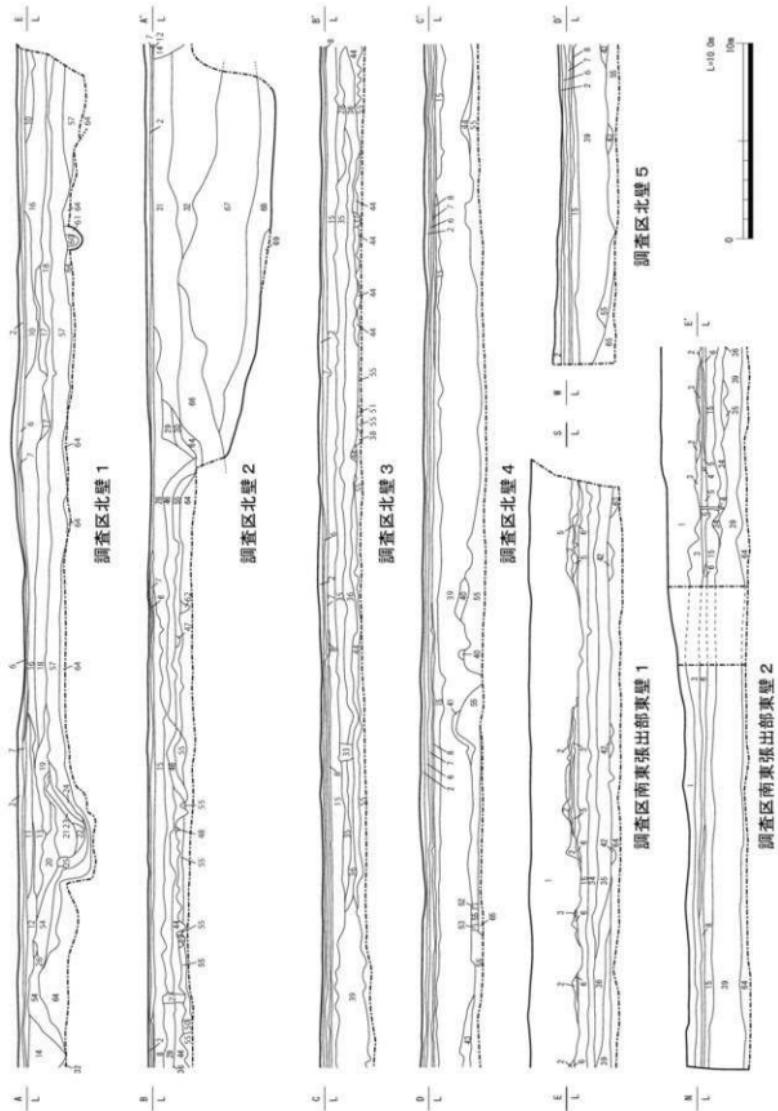
調査区は東西約90m、南北約4.5mと東西に長い、トレンチ状のものであつたが、西端から約24m地点から南に約26m延びる張出しと東端から約10m地点から南に約7m延びる張出しが存在するため、西側の張出部を南西張出部、東側の張出部を南東張出部と呼称することとした。

第2節 層位（第3図）

調査地の現状は農地であったが、南西張出部は駐車場として利用されていたため、南西張出部のみ耕作土の上に約70cmの盛土（第1層）が堆積している状況であった。



第2図 調査位置図 (1/5,000)



第3図 調査区断面図 (1/100)

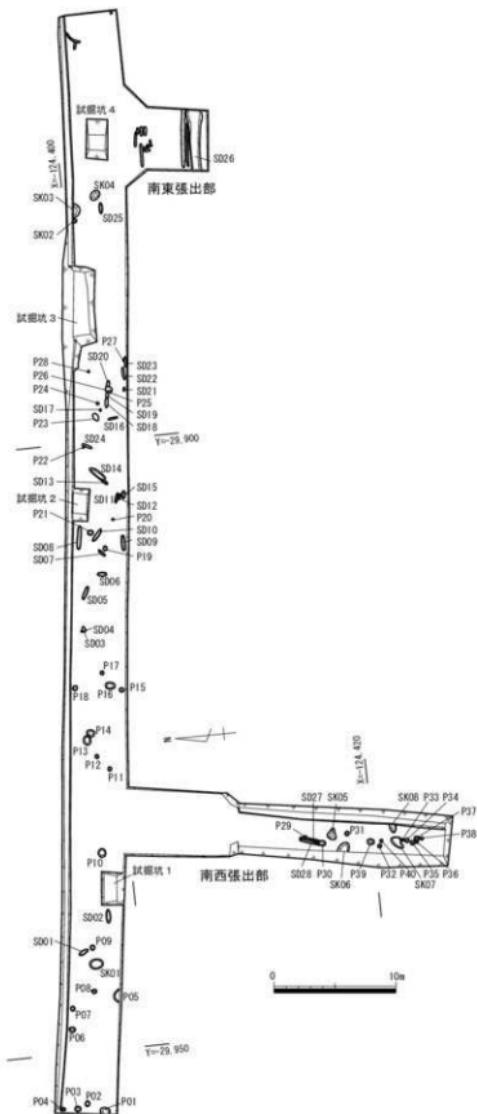
1. Huel7/	灰白色砂礫土（底土上層）	33. Huel10YR3/3	暗褐色砂礫土
Huel2. SY6/4	にぶい黄褐色砂礫土（僅土下層）	34. Huel10YR4/2	灰褐色砂礫土
2. Huel2. SY4/2	暗灰黄色砂礫土（耕作土）	35. Huel10YR4/3	にぶい黄褐色砂礫土
3. Huel5T/2	オリーブ褐色砂礫土（底土）	36. Huel2. SY4/2	細粒黃褐色砂礫土（流路、直徑4cmまでの様を非常に多く含む）
4. Huel2. SY4/1	暗灰黄色砂礫土（耕作土）	37. Huel10YR4/4	細粒黃褐色砂礫土
5. Huel10YR5/1	暗褐色砂礫土（底土）	38. Huel2. SY4/2	暗褐色砂礫土
6. Huel2. SY5/3	黄褐色砂礫土（底土、黄褐色砂礫土（Huel10YR5/6）、マンガンを多く含む）	39. Huel10YR3/2	細粒黃褐色砂礫土（流路、直徑5cmまでの様を非常に多く含む）
7. Huel2. SY5/3	黄褐色砂礫土（底土、黄褐色砂礫土（Huel10YR5/6）、マンガンを多く含む）	40. Huel10YR4/4	オリーブ褐色砂礫土（直徑2cmまでの様を非常に多く含む）
8. Huel2. SY5/2	暗灰黄色砂礫土（底土、黄褐色砂礫土（Huel10YR5/6）、マンガンを多く含む）	41. Huel10YR4/3	にぶい黄褐色砂礫土
9. Huel2. SY5/2	黄褐色砂礫土（S001埋土、直徑3cmまでの様を多く含む）	42. Huel2. SY4/2	細粒砂礫土（流路内の落ち込み）
10. Huel2. SY5/6	黄褐色砂礫土（流路、直徑5cmまでの様を非常に多く含む）	43. Huel10YR4/3	細粒砂礫土（直徑2cmまでの小様を多く含む）
11. Huel2. SY5/6	黄褐色砂礫土（底土、直徑4cmまでの様を非常に多く含む）	44. Huel10YR4/3	細粒砂礫土（直徑2cmまでの小様を多く含む）
12. Huel2. SY4/4	オリーブ褐色砂礫土	45. Huel2. SY4/2	細粒砂礫土
13. Huel10YR3/3	暗褐色砂礫土（底土、炭を非常に多く含む）	46. Huel2. SY4/2	細粒砂礫土
14. Huel2. SY3/3	暗オリーブ褐色砂礫土（底土、炭を非常に多く含む）	47. Huel2. SY4/2	細粒砂礫土
15. Huel10YR4/1	暗灰黄色砂礫土（第一遺構面基盤層（西側））	48. Huel10YR4/3	暗褐色砂礫土
16. Huel2. SY5/3	黄褐色シルト（第一遺構面基盤層（東側））	49. Huel2. SY4/2	オリーブ褐色砂礫土
17. Huel2. SY5/4	黄褐色シルト（第一遺構面基盤層（東側））	50. Huel10YR4/2	暗褐色砂礫土
18. Huel2. SY5/4	オリーブ褐色砂礫土シルト（落込みか）	51. Huel2. SY4/4	オリーブ褐色砂礫土
19. Huel2. SY4/4	オリーブ褐色砂礫土（S02埋土1、直徑8cmまでの様を多く含む）	52. Huel2. SYR3/4	暗褐色砂礫土
20. Huel10YR3/4	暗褐色砂礫土（S02埋土2、直徑8cmまでの様を多く含む）	53. Huel2. SYR4/2	暗褐色砂礫土
21. Huel10YR4/3	にぶい黄褐色砂礫土（S02埋土3、直徑5cmまでの様を多く含む）	54. Huel2. SY5/6	オリーブ褐色砂礫土
22. Huel10YR4/2	灰褐色砂礫土（S029埋土4、含む）	55. Huel2. SY5/6	オリーブ褐色砂礫土
23. Huel10YR4/4	褐色砂質土（S029埋土5）	56. Huel10YR4/2	暗褐色砂質土
24. Huel10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土（含む）	57. Huel10YR4/2	暗褐色シルト（第二遺構面堆積層）
25. Huel10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土	58. Huel10YR4/2	褐色砂質土（落込み埋土）
26. Huel5T/3	灰褐色砂質土	59. Huel10YR4/2	にぶい黄褐色砂質土（S009埋土）
27. Huel10YR4/2	灰褐色砂質土	60. Huel10YR4/2	褐色砂質土（PS76穴）
28. Huel2. SY3/3	暗褐色砂礫層（直徑2cmまでの様を多く含む）	61. Huel10YR6/2	黄褐色粘質土（PS75瓶形）
29. Huel2. SY4/2	暗灰黄色砂礫層（直徑4cmまでの様を非常に多く含む）	62. Huel2. SY4/4	オリーブ褐色砂礫土
30. Huel10YR3/4	暗褐色砂質土	63. Huel10YR3/2	暗褐色砂礫土（SK10埋土）
31. Huel2. SY4/3	暗褐色砂礫土（直徑10cmまでの様を非常に多く含む）	64. Huel10YR4/2	にぶい黄褐色砂質土
32. Huel10YR4/3	にぶい黄褐色砂礫土（直徑15cmまでの様を非常に多く含む）	65. Huel10YR4/2	暗褐色砂質土
		66. Huel10YR4/1	褐色砂質土（直徑3cmまでの様を非常に多く含む）
		67. Huel10YR4/6	褐色砂質土（直徑8cmの様を非常に多く含む）
		68. Huel10YR4/3	にぶい黄褐色砂質土
		69. Huel2. SY5/6	黄褐色シルト

第1層より下層では、約10cmの厚さで耕作土（第2層）が堆積し、その下に第3・5～8層の床土が続く。調査区東側では、床土直下に10～20cmの流路状の砂礫土（第10・11・13層）が堆積している場所も存在するが、基本的には床土直下に第一遺構面の基盤層である第15・16層が存在し、現地表面から深さ約20～40cmと非常に浅い位置に遺構面が存在している。この遺構面に形成された遺構の埋土に含まれる遺物の年代から、それらが古墳時代に属していることが知れるが、それよりも後世の遺構面を確認することはできなかった。第一遺構面からは、古代～近世の遺物も少量出土しているが、流路や耕作の影響により混入したものと思われる。

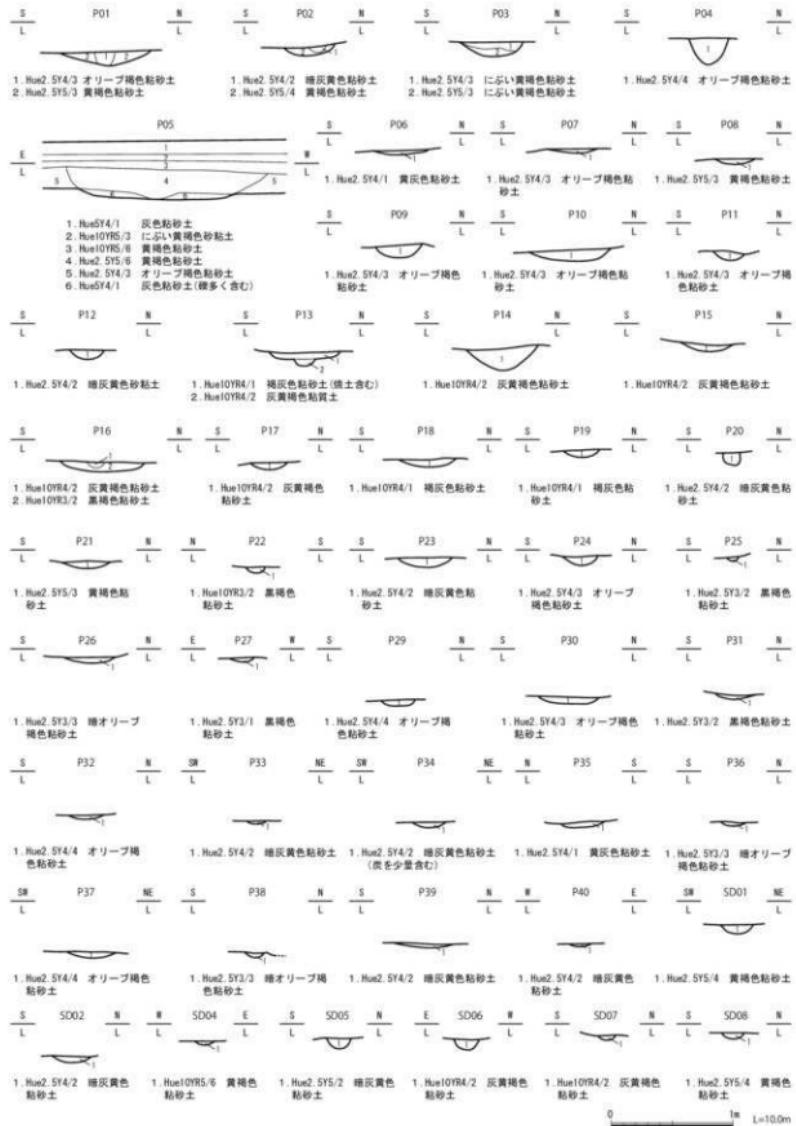
第15・16層より下は、調査区の東西で堆積状況が異なり、東側がオリーブ褐色シルトの第18層や暗褐色シルトの第57層といった比較的安定した土層が続くのに対して、中央付近から西では約20cmの厚さにぶい黄褐色粘砂土の第35層の下には、流路状堆積である暗灰黄色粘砂土の第36層が15～25cmの厚さで堆積しており、水の影響を強く受けたことがわかる。西端から約30mまでは流路状堆積である黒褐色粘砂土の第39層が約80cmと厚く堆積しており、水の影響が大きかったことがうかがえる。

第一遺構面より下において、調査地全体に存在する安定した土層は、地表面より約1.6mの深さに位置する第二遺構面の基盤層であり、地山と考えられるにぶい黄褐色シルトの第64層である。この第64層上に形成された遺構の埋土に含まれる年代から、それらが弥生時代に属していることを知ることができた。

調査区東側には、幅約10mの大きな流路5が南北に走るが、流路5の埋土の上に第64層が存在していることから、弥生時代以前から流路5が存在していることが明らかとなった。



第4図 第一遺構面平面図 (1/400)



第5図 第一遺構面検出遺構断面図（1）(1/40)

第3節 検出遺構

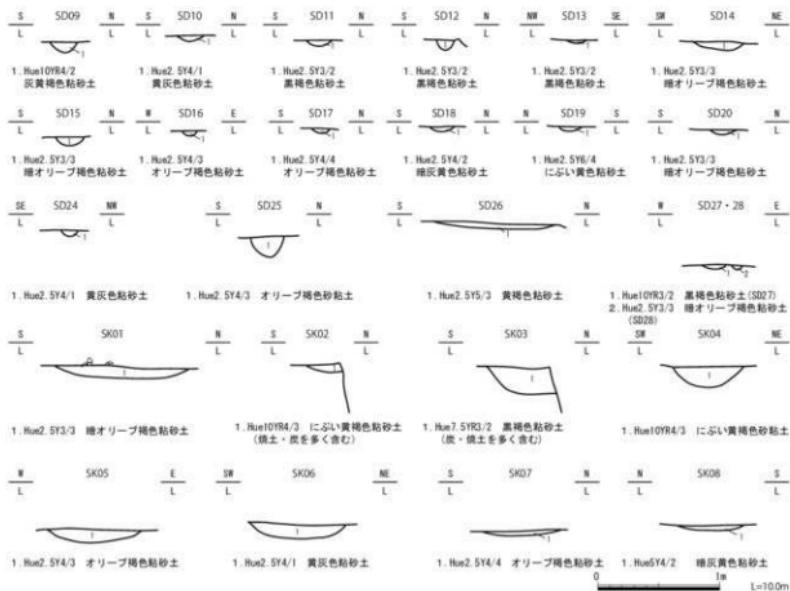
(1) 第一遺構面 (第4~6図)

第一遺構面からは、多くのピット・溝跡・土坑を検出したが、遺物の出土はほとんどなく、その性格は不明である。第一遺構面の遺構検出の際には、土師器・須恵器等の遺物が少量出土しているが、遺構に伴うものはSK01とSK07から出土した土師器のみである。その内、SK07から出土した土師器は小片であり、その年代判定は不可能であった。

SK01は、南北幅約110cm、東西幅約90cmの平面形が楕円形の土坑であり、その深さは9cmと浅い。その埋土内から土師器の甕3点が出土しており、その年代からSK01は古墳時代前期に属するものであることがわかる。SK01からは、土師器片がまとまって出土しており、他所からの流入というよりは、近隣で使用されたものが、投棄されたものと考えられる。

遺構は調査区全域にまんべんなく存在するが、東端付近はやや希薄である。図化していないが、東端付近には近世以降と考えられる鋤溝跡が多く残っていることから、耕作等により遺構が破壊されたものと思われる。

試掘坑3周辺に砂礫土が堆積していたが、その範囲がはっきりせず、断割りにより、深く堆



第6図 第一遺構面検出遺構断面図（2）(1/40)

積が続くことが明らかであったため、第二遺構面まで掘り下げた上で掘削を行うこととした。

(2) 第二遺構面（第7・8図）

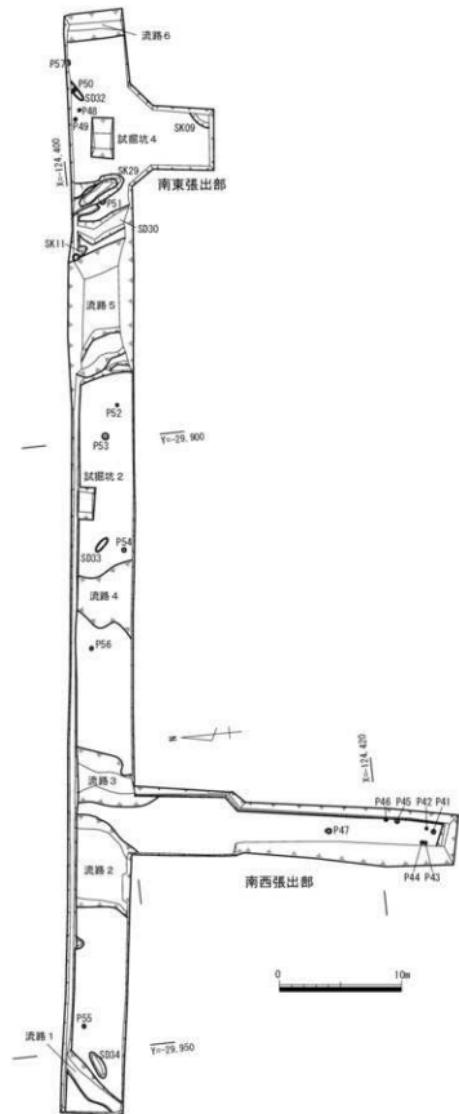
第二遺構面も、第一遺構面と同様にピット、溝跡、土坑を検出したが、第一遺構面と比べると希薄である。また、遺構に伴う遺物も少なく、SK29から出土したものに限られる。

この時期、この地は水の影響を強く受けたようであり、流路1～6が調査区全体に走っている。その方向は基本的に南北方向に走っており、北側に位置する山や水無瀬川方向から、南側に位置する淀川に向けて流れていったものと思われる。また、第二遺構面は、地表面より約1.6mの深さであるが、調査区中央より西側は掘削中に水が湧いてくるのに対し、東側は安定した土層であり水が湧いてくることはなかった。調査区内でも、特に西側が水の影響を受けやすい地であったことがうかがえる。

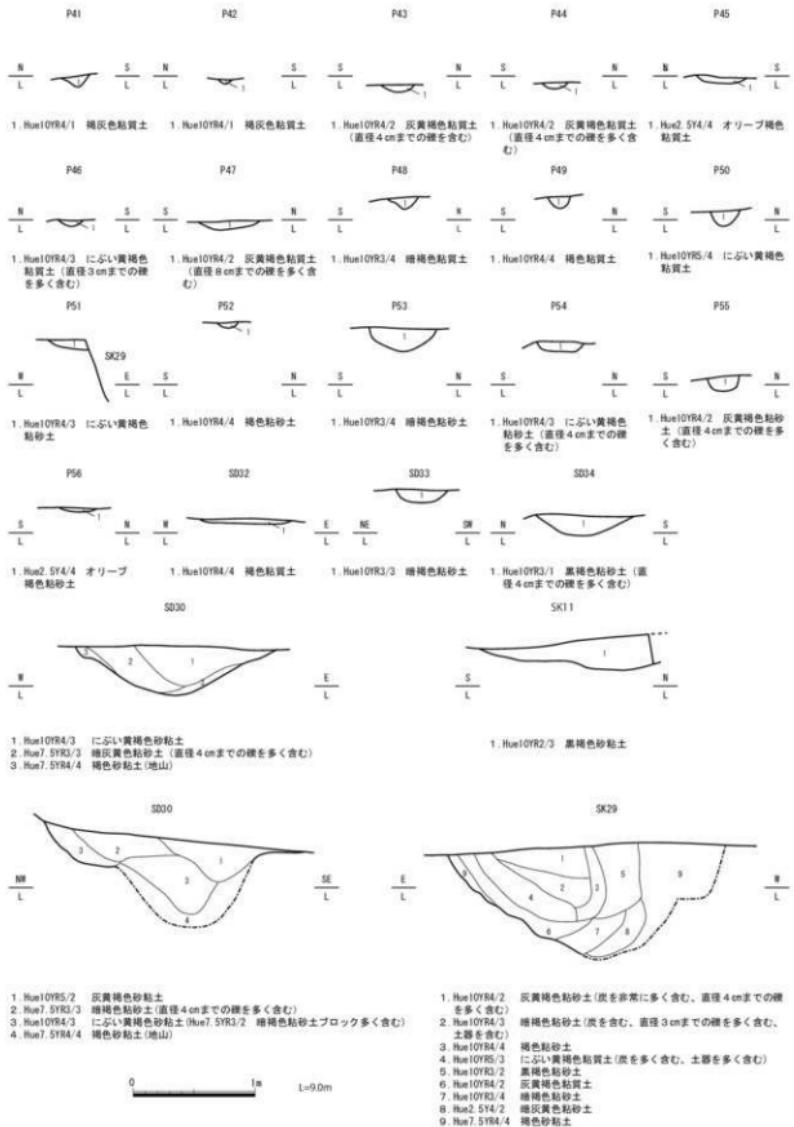
第一遺構面で検出した試掘坑3周辺の砂礫土は、第二遺構面まで掘り下げた結果、幅約10mの大きな流路（流路5）であることが明らかとなった。この流路5の埋土の上に第二遺構面の基盤層である第64層が堆積していることから、第二遺構面の遺構が築かれる以前から流路5が存在していたこととなる。また、流路5は、水が流れたり、埋まったりを繰り返していたようであり、第64層の上にも流路5の埋土が堆積している。その第64層上の流路5の埋土の上に、第一遺構面の基盤層である第15層が存在していることから、流路5は第二遺構面の遺構が形成された弥生時代以前から存在し、第一遺構面の遺構が形成される古墳時代までに埋まつた流路であることがわかる。

その流路5からすぐ東で幅約160cm、深さ40～60cmのSD30を検出した。調査区北壁付近では、北東から南西に向かって走っているが、北壁から南に約1mの所で向きを変えて、北西から南東に向かって走るように折れ曲がる。その埋土内から、遺物の出土もなく性格は不明である。

このSD30のさらにすぐ東には、SD30と並ぶようにSK29が存在する。SK29は幅約170cmであり、長さは調査区外にまで続いているため明らかではないが、検出した範囲だけでも4.5mを超える。このSK29の性格は不明であるが、その埋土内には多くの炭と縄文式土器、弥生式土器が含まれていた。この遺構の埋土内に含まれる最も新しい遺物の年代から、弥生時代以降に埋没したものと考えられる。流路5がこの遺構が形成される以前から存在していたこと、流路5以西と比べて、流路5以東が比較的安定していることから、流路5以東に集落が営まれ、その集落の人々がこの地にSK29を形成したものと思われる。



第7図 第二遺構面平面図 (1/400)



第8図 第二遺構面検出遺構断面図 (1/40)

第4節 出土遺物（第9図）

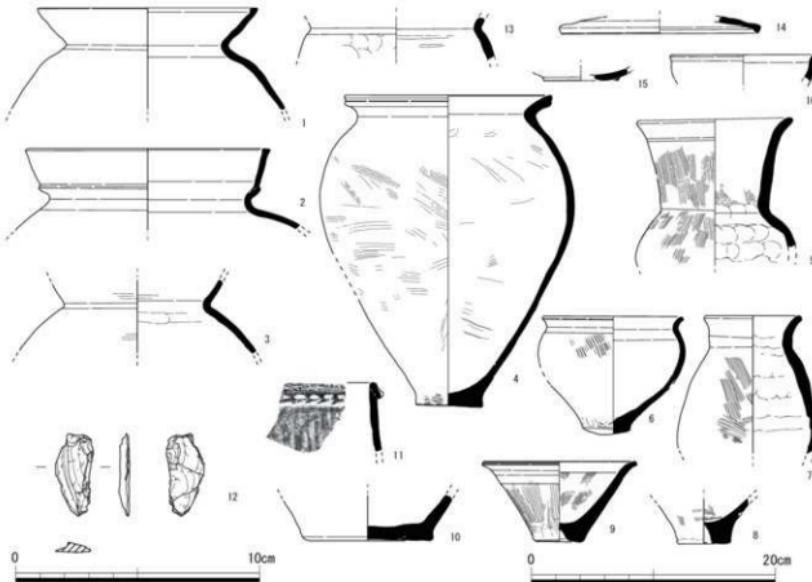
今回の調査で出土した遺物は、コンテナ2箱分で、弥生時代の土器や土師器の破片が大半を占めている。

調査は2面にわたって実施し、第1遺構面では、遺物は少ないが古墳から近世に至るまで多時代にわたって出土しており、第2遺構面は弥生時代の土器を中心とし、少數であるが縄文時代の土器を含んでいる。

以下は出土した土器について記述する。

1～3は土師器の壺である。1は口径18.0cmで、赤褐色を呈する。内・外面は剥離が顕著で、調整は不明である。口縁端部は内傾し丸く納めている。2は口径20.0cm、淡褐色を呈し、口縁部下方に段を持つ。これも内外面とも剥離が激しく、調整は不明である。3は口縁が欠損しているため、頸部からの復元で図化している。暗赤褐色を呈し、外面にハケメ、内面にはケズリを施している。いずれもSK01から出土しており、口縁部が内外面に肥厚する布留式後期のものと比定できる。

4～10は弥生式土器である。4は口径17.0cm、高さ26.5cmの壺である。「く」字状に外反する



第9図 出土遺物（1/2・1/4）

口縁部を持ち、端部には沈線文を施している。外面の上部は右下がり、中部は横、下部は縦方向のハケメを施している。底部にはタタキメを残す。内面底部には若干のケズリが見え、上部はハケメを呈する。内・外面にススの付着がみえる。5～7は壺である。5は口径12.8cmの長頸壺で、口縁部はやや外反する。外面は全体にハケメを施し、内面には横方向のケズリを施している。6は口径11.6cm、高さ9.7cmの小型の壺である。口縁は短く外反し、端部を丸く納める。強いヨコナデを残す。外面には縦方向のハケメを施し、外面2か所の黒斑が見られる。内面底部には強い指頭圧痕が見える。7は口径8.0cmで、外面にハケメを施す。内面には粘土紐の痕跡を顕著に残す。8は底径8.5cmの壺の底部片で、外面にハケメを呈する。9は口径12.8cm、高さ6.6cmの小型の鉢である。体部はやや直線的に外方向に開き、口縁端部は外反する。外面は縦方向のミガキを呈する。内面はハケメを施し、底部には黒斑が見られる。底部外面に指頭圧痕が見える。これらの土器は遺構SK29より出土しており、弥生時代後期前半期に比定しておく。10は壺あるいは壺の底部と考えられる。前述の土器よりは若干、古相を呈している。摩滅が激しい為詳しい調整は不明である。生駒西麓産か。

11は縄文土器の鉢の破片で、口縁端部に刻み目突帯文を呈する。縄文晩期と考えられ、他にも小片であるため実測はできなかつたが、突帯文を呈する口縁部片が出土している。

12は長さ3.3cmのサヌカイト製の石器で、使用痕が見られることより削器の剥片とも考えられる。これもSK29より出土しており弥生時代のものと考えられる。

13～17は第1遺構面で出土した遺物である。いずれも破片で調整等、不明のものが多い。簡単に器種を記述する。

13は土師器の壺の頸部片で、外面にユビオサエを呈する。14は須恵器の杯蓋の口縁部である。15は瓦器椀の底部、16は天目茶碗の口縁部である。いずれも遺構を伴っていないため、混入品と考えられる。

第5節 まとめ

今回の調査においては、遺構に伴う遺物が少なく、その遺構自体の性格を知ることができるものは少なかったが、第一遺構面においては古墳時代の土坑1基、第二遺構面においては弥生時代の土坑1基を確認することができ、広瀬遺跡周辺においても弥生時代及び古墳時代の集落が営まれたことが明らかとなった。

弥生時代の遺構・遺物は、桜井駅跡⁽¹⁾・青葉遺跡⁽²⁾・広瀬溝田遺跡⁽³⁾・越谷遺跡⁽⁴⁾等から見つかっているが、今回の発掘調査により、広瀬遺跡周辺にも弥生時代の集落が営まれており、SK29と流路5の位置関係等から調査地より東側に広がっていたことが想定される。

古墳時代の遺構の検出例はより少なく、広瀬遺跡⁽⁵⁾と越谷遺跡⁽⁶⁾から1例ずつあるのみで、

明確な集落跡は見つかっていない。そのような中で、当調査で見つかった古墳時代の遺構は、土坑1基のみであるが、今後の貴重な資料となりえる。

また、当調査地の特徴として挙げられるのは、鋤溝跡や流路内からの後世の遺物の混入は見られるものの、弥生時代と古墳時代以外の明確な遺構が確認されなかったことである。広瀬遺跡は奈良時代～近世に至るまでの複合遺跡であり、近年では縄文時代の遺構が見つかるなど⁽⁷⁾、その年代幅を大きく広げており、本町内では全時代にわたって人々の生活が営まれた地域である。の中でも、中世や近世の遺構・遺物は広瀬遺跡全域で確認されてきたが、当調査地において確認できなかったことは、この地がほとんど人の手が入らなかった場所である可能性がある。

当調査地の北西約100mの場所に位置する平成24年度の調査地からは、平安時代の建物跡群が検出されていることから⁽⁸⁾、この地においても平安時代の遺構が見つかる可能性が高いと思われたが、今回の調査では明確な平安時代の遺構は検出されなかった。平成24年度の調査地と当調査地の標高は大差ないが、平成24年度調査の平安時代の基盤層が安定した土層であるのに対して、当調査地、特に調査区西半は流路の影響を強く受けていることから、生活の場としては利用されてこなかった地である可能性がある。

当調査の数多く見つかった流路の中でも、流路5は幅約10mと非常に大きなものであった。このような河川等は人々の生活には欠かせないものであるので、このような各地に存在する流路を繋ぎ合わせることによって、かつての自然環境も再現していきたい。

【註】

- (1) 中津 桦 「島本町文化財調査報告書」第8集 島本町教育委員会 平成18年
中津 桦 「島本町文化財調査報告書」第9集 平成18年
小川 裕見子「第5章 出土遺物」「桜井駅跡発掘調査概要」大阪府教育委員会 平成19年
- (2) 中津 桦 「-2 平成18年度青葉地区遺跡範囲確認調査」「島本町文化財調査報告書」第10集 島本町教育委員会 平成19年
木村 友紀 「2、青葉地区（A B T15-2）」「島本町文化財調査報告書」第31集 島本町教育委員会 平成29年
- (3) 久保 直子 「第1節 水無瀬地区遺跡範囲確認調査」「島本町文化財調査報告書」第14集 島本町教育委員会 平成22年度
- (4) 大塚 隆 「第3節 越谷遺跡の調査」「越谷遺跡 他 発掘調査報告書」 名神高速道路内遺跡調査会 平成9年
- (5) 久保 直子 「島本町文化財調査報告書」第13集 平成21年
- (6) (4) と同。
- (7) 木村 友紀 「島本町文化財調査報告書」第28集 島本町教育委員会 平成27年
- (8) 木村 友紀 「島本町文化財調査報告書」第26集 平成26年

報告書抄録

ふりがな	しまもとちょうぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	島本町文化財調査報告書
副書名	広瀬遺跡遺跡範囲確認調査概要報告
卷次	
シリーズ名	島本町文化財調査報告書
シリーズ番号	第35集
編著者名	木村 友紀、久保 直子、坂根 麻
編集機関	島本町教育委員会事務局 教育こども部 生涯学習課
所在地	〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号 TEL.075-961-5151
発行年月日	平成31年3月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		所在地	市町村				(m ²)	
遺跡範囲								
ひろせいいせき 広瀬遺跡 (H.S14-1 天葉)	しまもとちょうひろせ 島本町広瀬四丁目555 -1、555-3の各一部	27301	14	34° 88° 14°	135° 66° 95°	2014.9.1 ~ 2014.10.6	約549m ²	宅地造成工事に 伴う記録保存調 査

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ひろせいいせき 広瀬遺跡 (H.S14-1 天葉)	集落	弥生・ 古墳	土坑・溝	縄文式土器・弥生式土器 ・土師器	弥生時代・古墳時代の 遺構・遺物を確認

島本町文化財調査報告書 第35集

発行 島本町教育委員会
〒618-8570 大阪府三島郡島本町桜井二丁目1番1号
TEL.075-961-5151

発行日 平成31年3月31日

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル舟附町300
TEL.075-266-0961

図 版



第一遺構面全景（東から）



第一遺構面南東張出部全景（北から）

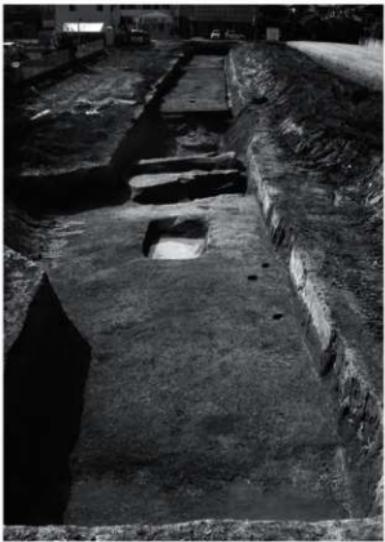


第一遺構面全景（西から）

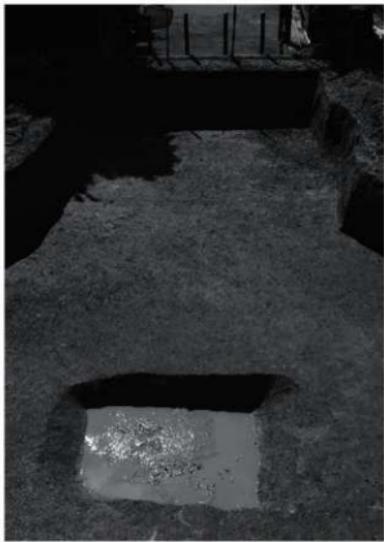


第一遺構面南西張出部全景（南から）

図版二
第一遺構面全景



第二遺構面全景（東から）



第二遺構面南東張出部全景（北から）



第二遺構面全景（西から）



第二遺構面南西張出部全景（南から）



SK01遺物出土状況（北東から）



SK29完掘状況（南東から）



SK29畔断面（北西から）



S D 30完掘状況（南東から）



S D 30北側畔断面（南西から）



S D 30南側畔断面（南東から）



調査区北壁（東端）



調査区北壁（中央付近東）



調査区北壁（流路5）



調査区北壁（中央付近西）



南西張出部東壁（北端）



調査区北壁（西端）



南西張出部東壁（南端）

図版七 出土遺物（一）



図版八 出土遺物(二)



9



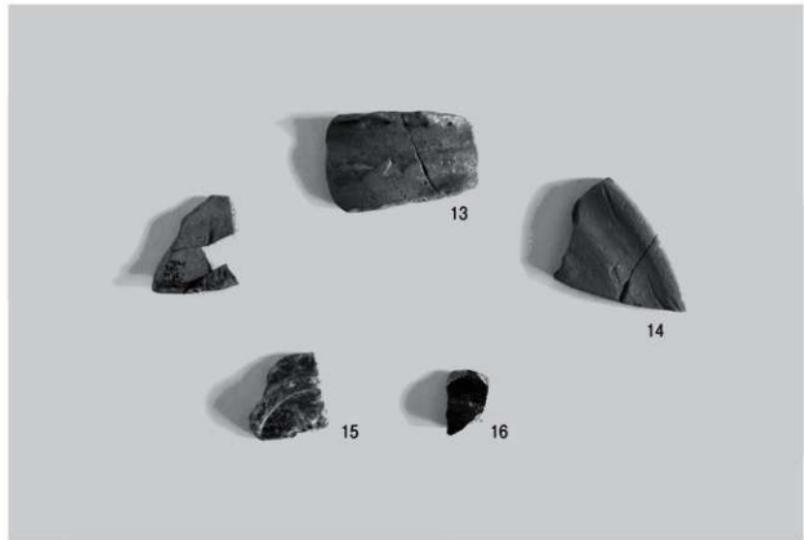
11



10



12



13

14

15

16